生成する「非在」

松下千里評論集

詩学社

著者略歴
松下千里（まつした　ちさと）
1951年3月14日　兵庫県に生まれる。早稲田大学文学部卒業。
詩誌「射撃祭」「グッドバイ」に参加。1984年「生成する『非在』—古井由吉をめぐって」により第27回群像新人賞評論優秀作に当選。
1988年3月11日急逝。享年36歳。
著書　詩集『赤頭巾ちゃんへの私的ディテール』（紫陽社刊・1978年10月）

生成する「非在」
一九八九年三月十四日発行
著　者　松下千里
装丁者　十河雅典
発行者　嵯峨信之
発行所　詩学社
東京都文京区本郷六—二二—八
電話　〇三—八一三—五二四五
振替東京八—一二七一九
印刷所　工友会印刷所
製本所　栄久堂
定　価　一八〇〇円
©Ikuo Matsushita, 1989 ISBN4-88246-027-0

生成する「非在」

松下千里評論集

詩学社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生成する「非在」　目次

I

生成する「非在」 ―古井由吉をめぐって 9
密室の中の〈スペースシップ〉 ―村上春樹論 38
身体と闇 ―尾辻克彦論 59
空隙としての異性 ―富岡多恵子論 73
一隅の発見 ―河野多恵子論 91
冬の惑星として ―増田みず子論 112
テクストからの曲視 ―後藤明生『壁の中』 132
模型国家ゲーム ―倉橋由美子『アマノン国往還記』 136
〈環境〉というまどろみ ―金井美恵子『あかるい部屋のなかで』

民主主義下文学の禁忌 ―江藤淳『批評と私』 144

II

過密の発想 〈若者コトバ〉 151

《凹型原理》と「女性言語」 ―宮迫千鶴『〈女性原理〉と写真』によって 159

手になる唄 ―岩田宏詩集『独裁』 164

言葉の卵劇 ―吉岡実論 173

アイスクリームから新しくなる ―阿部恭久論 183

ＭＥＴＡ ＭＩＮＤ ―犬塚堯詩集『折り折りの魔』 193

神話エネルギーの異相 ―粕谷栄市論 197

楕球の中点 ―清水哲男論 204

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生成する「非在」
——古井由吉をめぐって

1

自己が自己に違反されつつ生きるということ、私が私を証明しない事態というものを、人は普通内面の問題と呼んでいる。ようするにそれは主観に過ぎないと。そしてそれが客観の場に照らし返された時、呼び名はすでに精神病、あるいは狂気というものに変っていて、問題は主体の外側に放擲されてしまう。というのも、私に対する私という設問が、内面の問題というよりは、内面を見失わせる問題であるからだ。虚空に自分自身を見たと言えば、間違いなく幻であるように、自己が自己を見い出す視点というものは、ある歪み、あるいは飛躍、ずれというものを想定することなしには考えられない。主体そのものを考察の対象とするということのなかには、どうやらこの痙攣的な認識の異常が含まれるのである。もしもその問題に、リアリティの保証を与えようとするなら、狂気でしか示し得ないような。

たしかに文学はこの歪み、飛躍、ずれというものに深く根ざしている。精神とは、外部世界との均衡を欠いて、断絶感を余儀なくされた自意識を、再び世界と釣り合わせるための指標のことを言う。だが、自己が自己に違反されるとは、このことではない。このずれから望まれた自己が、たとえ異貌として映ったとしても、それは自己というものへのカタルシスを語っているに過ぎない。この異貌がたとえ狂気として感じられたとしても、それは感性の絶対的経験として、私への確信を強めはしても弱めることはないだろう。ようするに、私は私であるという確信の生きているところでは、私対私の問題というのは起りようがない。私であることが問題になるのは、人がそれを見失ってしまった時、私の内と外とが、その基底部を払拭されたところで、自己が回帰すべき孤独を喪失した時なのだ。そして、私が私であることという、この主体における二重の黙契を考え始める時、人はすでに主体であることの能動的思考を奪われている。この問題が、問題という名の呪縛であるのはこのためだ。

私を見失ってしまった私。古井由吉はここから書き始める。二十代の処女作『木曜日に』は、単独行の山歩きで周囲と自分自身への距離感を狂わせてしまった者が、都市の日常生活のなかでおもわぬ不適合をみせてしまうことの経緯を、あの古井に独特な、狂躁への予感を常にぎりぎりのところで隠匿しているような文体で描写した作品だ。描かれたのは不思議なとしか言いようのない登山と、そこからの帰還である。その登山には風景だけが間近であり、微細であるが、それが登山であるからには当然あるはずの力の喘ぎと息の乱れは遠くに引いていて（たとえそれが力と息への過度の集中から起ったにしろ）、音のないフィルムのように静まった意識だけが、唯一の明りのような視線をつくっている。その視線とは次のようなものだ。

ひたすらな食欲に耽る獣のように、私は顔も洗わずに食事にかかり、顎を鈍重に動かして味気ないパンを噛みながら、すでにその時から、何かを見つめる気持になっていた。何というあさましい孤独だろう、と私はつぶやいた。

ものを食うことに解釈はない。ものを食うことや眠りに、なにかしらあさましいものが感じられるとするなら、それはもともと人生にとっては原因でも結果でもないはずの食うことや眠ることの必然が、通常私たちが自分たちの人生を生起させていると信じている、意志の面を剝いでしまうからだ。

この登山で主人公は、孤独が昂じたところで自失してゆき、主体には鮮やかな知覚の錯綜だけが残される。孤独とは、単に一人でいるということではなく、一人きりになっても尚自身を自覚する疎ましさが残るということだろう。この意識の疎ましさとは、むろん都市の日常から運ばれて来たものだが、日常の対極としての山は、一層このことを露わにしてしまう。しかし、まるで山あいに投じられてしまったかのような風景への没入が、孤独というよりはむしろ陶酔として描かれているのは、感覚の錯綜が主人公の意識を剝いでしまっていることに、単なる自己喪失ではない、恍惚とした解放を感受していることにもよる。

実際この登山は、解釈と意志の両面を削がれることで、ほとんど夢と同質のものに支配されており、帰還の後にも続く非現実感は、起き際のまどろみにも似た、夢から醒めてしまうことへの異和感とも思えるのだ。そしてこの夢という眠りの鏡とも言うべきものへの類推をここで持ち出すとするな

ら、それはそのまま古井由吉のその後の作品の流れに響く谺を聴くことにもなるだろう。眠り、あるいは夢というような、本来認識の影となっている領域が、ひとつの光源を受けて均質な視野のうちに開かれるとするなら、今まで明瞭だと思われていたものは、明瞭さを区別するものを失うだろう。正常は異常とひとつの輪郭の上に重なるかもしれない。この処女作には、こうしたまなざしへの確認がすでにある。また、木曜日に起ったという山頂での忘我や、オフィス街で、昼休みに行き会ったなじみの女性が識別できなかったというような自失の体験は、結局私たちの日常が、自身を自覚し、他者をそれと認め、主観と客観とを巧妙に区別しながら営まれているということを語っているのだ。主観と客観との識別を、危く、孤独に重ねながら、私たちの日常は営まれている。

しきりにものを食いながら、「すでにその時から、何かを見つめる気持になっていた。」とある。私が私を見つめる視線とはこうしたものだろう。そして私が私を見失うのも——。そしてこの視線は、古井由吉が自身の言葉を見つめてゆく視線でもある。また同時に、ものを食うという生活の最低の鞍部に自身を保持しようとする姿に注がれている、この視線の先をよぎる、人間という種の影、群れとしての人間を、この時はじめて古井由吉は見たのかもしれない。

次作『先導獣の話』では群れがテーマになる。都市の雑踏に群れのイメージを読むこと自体はありふれた連想に属する。それぞれは違う目的のために動いているはずの者同士がいつしか同じ歩調になり、一体になって駅の階段を上ってゆく、交差点を渡ってゆく、この光景に一種異様な印象を抱くことは誰にでもある。そこに社会科学的通念を導引して、都市の孤独だ、集団における個の疎外だというような聞いたふうな感想に捕われることさえたびたびありそうな気がする。だが、『先導獣の話』

が独得であるのは、それが個の疎外ではなく、個の融解として書かれた点だ。体の隅々まで決して常識以外のものが住みつくとは思われない一人の平凡な男が、個を透過して尚も個に輻輳する第二の主体ともいえるものを、この群れの中に嗅ぎ出してしまう点にある。

久しぶりに地方から都会にもどって来た主人公は、朝の群集の静けさに目を見はったという。都市の日常のなめらかな整合性に驚いたと言うべきだろう。そしてそのこととは逆に、主人公には、急に人間の存在が不透明なものに感じられてくる。朝の群集の中に祭りの供物を選ぶように《先導獣》に喩えられる人物を捜す主人公は、日常の整合性の中に、じりじり燻る狂躁のゆらめきと、個の状態の中に、個を越えた不透明な存在への耽溺があるのを発見する。この先導獣について古井由吉は、「要するに、先導獣というのはひとつの姿でなくて、個と群れのほとんど無意識的な交渉の中にあまねく存在する」（エッセイ『群れの中の自我』）と説明している。だが、「個と群れのほとんど無意識的な交渉」とは、私であることがその境界で、私でないものと意識されることなく混沌と混じり合っているということであり、それはすでに存在の合理への懐疑である。

あまりに合理的なものはしばしばいきなり非合理的なものへ転化すると言われるが、事実はそんなにドラマチックなものではなかろう。あまりに合理的なものは、ある時、そっくりそのまま非合理的なものであるのだ。ちょうど野獣が変わらぬ足どりで明るい野を横切って暗い繁みの中へ入って行くように。

光はある時そっくり闇になり、合理はそのまま非合理になるという。それは人間の主観と客観とを分かたせているものへの懐疑であり、主体性への懐疑でもある。

このようなある日主人公はデモ隊に巻き込まれておもわぬ怪我をするが、警察はそんな彼に煽動者の嫌疑をかける。知らぬ間に先導獣にされていたことになるが、それは反転する主体性の寓話であると同時に、他者を見る視線の惑溺が、すでに自己の不可視なものへの帰属を証していたということでもある。

あらゆる差異を越えて、人もまた群れなのだと想い至る時、水溶液のように稀薄に失われそうになる意識とともに、なつかしく暖められてくる存在の密度がある。個の融解とは、人に関するこの濃度のことだ。稀薄さを奪われ、ある温りとともに一定の濃度になってゆくこと。人一般と自身とが、私の内と外とが、濃淡の差でしかなくなるようなことだ。だが、なんであれ人を私と言い変えることができないように、私を人と言うこともできないのだ。古井的人物とは、この言葉と存在の、識別とその混沌との、異質に背反しあう項目のあいだで、ついに自失ということに自己表現を見い出してしまったような者たちと言うことができるだろう。

2

エッセイ『私の文学的立場』で古井由吉は、「どうやら私にとって、個がなかば群れに融けているというのが、いちばん自然な姿なのだ。」と書いている。これは自己をめぐる定数一(いち)への異和である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com